

大会開催報告書

2026年2月8日（日）、雪が降る厳しい寒さの中、東京武道館大武道場にて「第9回 JDKF.空手道競技大会」を開催いたしました。

国内初となる、きこえない・きこえにくい選手のための「音声が見える空手道大会」として2018年にスタートした本大会は、今回で9回目を迎えました。審判員の音声による合図をライトの点滅や視覚表示で知らせるなど、きこえない・きこえにくい選手が「聞こえないこと」をハンディと感じることなく、安心して競技に集中できる環境づくりを大切に継続してまいりました。

本年度は雪の影響およびインフルエンザ流行の影響により棄権者が多く見られましたが、最終的に151名（うち32名がきこえない・きこえにくい選手、119名がきこえる選手）が出場しました。厳しい天候の中でも選手・関係者の皆様のご協力により、無事に大会を開催することができました。

競技は形・組手に加え、団体形も実施し、4面のコートで同時進行にて行いました。各コートでは、安全かつ円滑な運営を心がけながら、選手一人ひとりが持てる力を存分に発揮できる環境を整えました。

本大会の大きな特徴である「音声が見える」工夫については、これまでの取り組みをさらに発展させました。

従来のライトによる合図表示に加え、

- コートごとの視覚的合図方法の最適化
- 競技進行状況の視覚表示の強化
- スタッフ間の情報共有体制の改善
- 手話および視覚サポート体制の拡充

など、より多角的な情報保障を実施しました。

雪という厳しい状況の中でも、多くの皆様のご理解とご協力に支えられ、大きな事故もなく大会を終えることができました。本大会は単なる競技大会にとどまらず、「誰もが同じ土俵で挑戦できる場」を実現する取り組みとして、着実に進化を続けております。

ご参加いただいた選手の皆様、ご来場いただいた皆様、ご支援・ご協力を賜りました関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

今後も「音声が見える空手道大会」として、より一層の環境整備と競技力向上の両立を目指し、取り組んでまいります。



審判員による「勝負始め」の手話（組手競技）



審判員による「始め」の手話（形競技）



ヤメの合図と同時に赤いランプが点灯



「ヤメ」の合図を手話で伝える手話通訳者



残り 15 秒の合図と同時に青いランプが点灯



「残り 15 秒」の合図をジェスチャーで伝える



きこえる選手も手話で形名を申告「平安 5 段」



形名申告のタイミングで iPad を掲示



手話で挨拶する細谷義男審判長



手話で選手宣誓をする湯澤日向選手



実行委員会とボランティアスタッフのみなさん